

愛媛果研ニュース

No.35 平成 29 年 10 月



収穫間近の早生温州みかん



11月に宇和のトンネルを抜け国道56号線を下って行くと、車窓右側にたわわに実ったミカンが山々を黄金色に染め、コバルトブルーの法花津湾が一望できます。この景色を見ると南予に来たのだと実感します。南予へは二度目の勤務ですが、10年前に比べ山の景色に変化がみられます。ご多聞にもれず農業者の高齢化の影響で耕作放棄されたミカン山が増えています。いかんともしがたいことですが、朗報もあります。ここ数年ミカン価格の高値安定もあって、みかん研究所がある玉津地区には30歳以下の若い農業者が30数人就農しており、共選単位では県下で最も多いのではないのでしょうか。幼稚園や小学校の児童数も以前に比べ多くなっているといわれています。若者が多くなると山々に変化が見られるようになりました。耕作放棄地を請け負い再生整備したり、老木園を改植し苗木を新植したりして、ミカン山が若返っています。将来に大きな期待が持てます。

こうした若い農業者に対する技術支援も重要な課題です。果樹栽培は一見するとルーチンワークと思われがちですが、多種多様な知識、技術を身に付けていなければ、刻々と変化する事象に対応できません。県ではこうした若い農業者のスキルアップのために「匠の技の目線」をICTを利用し解析し、分かりやすい視覚情報として提供する試験を本年度から開始しました。

今回は①温州みかん若木の品質向上技術について、②温州みかんにおける秋肥の施用時期とその吸収について、③県内への侵入が懸念されている「ビワキジラミ」についてとりまとめました。一読していただき、少しでも皆様の一助になれば幸いです。

果樹研究センター みかん研究所長 加美 豊